資源循環

プラスチック資源の適正循環を目指して (41)

持続可能な社会をつくる元気ネット　理事長　鬼沢 良子 氏に聞く

NPO法人「持続可能な社会をつくる元気ネット」は、「暮らし・地域から出るごみ（環境負荷）に生活者・NPOとして責任を持ち、持続可能な社会に貢献したい」という理念のもと、1996年から活動を続けている。消費者が生活の中でごみの削減やリサイクルに向けた取り組みを実行していくための普及啓発や、人材育成などに注力しており、プラスチック問題に関してもさまざまな啓発等を行ってきた。そうした同NPOでは、今月から始まった国のレジ袋有料化義務化は、「プラスチックの賢い利用と資源循環の入口」と位置付けている。同NPOの鬼沢良子理事長に、消費者目線でのプラスチック対策のあり方などについて聞いた。（黒岩修）

レジ袋有料化は「プラの賢い利用と資源循環の入口」

最新の情報を伝え、理解してもらうことが必要

クイズ形式など楽しみながら知ってもらえるような普及啓発活動に力を入れている

――元気ネットのプラスチック問題に対する取り組みは。

「私たちは、生活者にどのように情報を伝えていけば個々の生活の中でごみの削減やリサイクルに向けた取り組みを実行して行けるかという視点で、普及啓発活動に注力してきた。また単に普及啓発だけでなく、問題を解決して行くために生活者がどのようなことに取り組んでいくべきかを考え、そうしたことを伝えて行くための人材を育成するといった点にも力点を置いて活動している。

プラスチックに関しては特に海洋汚染がクローズアップされるようになってからは、消費者にとっても自分の生活に密接に関係しているということを実感でき関心は高まってきている。しかし、関心を持つだけでなくプラスチックを減らし、資源循環して行くために実際にどのような活動を行なっていくのかが重要で、それに向けて3R推進団体連絡会の事業として、人材育成を自治体とも連携しながら進めてきた」

――そうした活動を通じて分かったことは。

「地域で真面目に普及啓発に取り組んでいる方や、毎日の生活の中でリサイクルに向けた取り組みをしっかり行なっている人々の間でも、なかなか情報が更新されていないのが実情だ。リサイクルの技術は非常に進歩しているにもかかわらず、20年程前に自治体が地域で説明した知識のままの状態の人がとても多いことが分かった。地域の方々の情報を最新のものに変えていかなければならない。分けるだけでなく、分けたものがリサイクルされ何に生まれ変わるかを知って初めて、資源循環を正しく理解したことになる。リサイクルフロー、再生品を知り、それを購入するということが大切だ。私たちはSDGsの中に盛り込まれている『ライフスタイルに関する情報と知識を持って、一人ひとりが行動の変革を起こして行く』ということが最も重要だと思っている」

――レジ袋有料化義務化がスタートしたが。

「レジ袋有料化はプラスチックの賢い利用と資源循環の入り口だととらえている。大変重要なことではあるが、有料化したからそれで良いというわけではない。生活者の意識はさまざまで、有料でも3～5円程度ならマイバッグを持たずにレジ袋を買うという人もかなりいると思う。あくまで有料化は入り口で、今後どのように進めて行くかということが、ワンウェイプラスチックを削減して行く上ではより重要になってくる」

――今後のプラスチックの削減や資源循環に向け取り組むべきことは。

「使い捨てのプラスチックをいかに減らして行くかということと合わせ、いかに代替品に移行していくかということが重要だ。バイオマスや再生資源を活用した製品等の利用率をあげて行くことが大切だと考えている。これまで多くの企業は価格が安いのでバージン材を使ってきたが、今後企業はバイオマス素材や再生素材にシフトして行く努力をし、またそうした企業を消費者が評価し応援して行くことが重要だ」

――リユースの取り組みについては。

「これまでいくつかの大規模イベントなどで、リユースカップ等が使われてきた。ただ、そうした『非日常』でのリユースカップ使用は広がってきているが、日々の生活の中で使うということはまだ浸透していないと思う。これを一歩進めるために良い取り組みだと思っているのが、アサヒとパナソニックが共同で展開している『森のタンブラー』による使い捨てカップの削減だ。バイオマスプラスチックを使っている上見た目もお洒落で、環境に関心がなくても使ってみたいと思わせる商品というのは非常に良いと思う。こうした取り組みを広げて行くべきだ」

――リサイクルには回収の仕組みも重要だが。

「消費者目線で考えると、店頭回収の多様化というのが一つ有用な方策だと思っている。そういう意味で、東京都東大和市がセブンイレブンと共同で行っているペットボトルの店頭回収の仕組みには注目している。東大和市のケースは、自治体とコンビニ、さらに市の資源回収を行う事業者との連携による取り組みとなっていることが評価すべき点だ。地域ごとにそれぞれの事情に合った多様な回収の仕方があって良いと思う。財政が厳しい自治体が多い中で、負担を少なくする意味でも、さまざまな回収方法を考えていくべきだ。前向きな取り組みを行っているところについては、容器包装リサイクル制度の負担金を軽減するなどの措置があれば、より進んでいくだろう」

――こうした先進的な取り組み等を伝える役割は、今後ますます重要になってきそうだが。

「冒頭にも述べたように、生活者にしっかり最新の情報を伝えること、そして伝えていく人材をきちんと育成していくことが大切だ。ペットボトルが生まれ変わって何になるかについてクイズを交えながら説明するなど、私たちは関心のない人たちにも楽しみながら知ってもらえるような普及啓発活動に力を入れてきた。関心のない人に座学だけで知ってもらい行動を変えていくというのは難しいが、クイズなどで楽しみながら感覚で覚え関心を持ってもらえるというケースは多い。伝え方も場面に応じて工夫していくことが大切だ」

「過去の青年部全国大会の中で、2回ほど地域ブロックで競う催しがあったが、いずれも九州・沖縄ブロックが優勝した。やると決めたら一致団結してとてつもない力を発揮できるブロックだと

青年部会長全国駅伝トーク (9)

～循環型社会への襷～

長崎県産業資源循環協会青年部の久保田修部会長からのたすきを受け、今回登場するのは佐賀県産

授業の内容は、

か目的を定めて参加しやすい事業を行っていかなければならないと考えている。私自身も会社役員ではあるが経営一族の直系ではなく、いわばサラリーマン会員と言える立場なので、そうした会員

できるだけ児童数の多い小学校で、会員のお子さんが在学しているところを中心に選んでいる。お父さんが講師を務め、子供には当日まで内緒にしておくといったサプライズなども企画している」

――九州・沖縄ブロックでは環境教育に積極的

義を表す事業の一つともなっている。この事業を長年行ってきたことが認められ、昨年青年部で佐賀県知事賞をいただくこともできた」

――今後のプラスチッ

る。これは子供たちから非常に喜ばれている。

そして3時限目は、九州・沖縄ブロックで始めた『約束の木』を作る時間となっている。葉の形に切った紙に授業の感想や学んだこと、今後環境

で、損得勘定なく将来にわたる仲間が作れる場だと思っている。同世代で意見が言い合える環境なので、会員の方には何か困った時、道に迷った時に相談できる仲間を作ってほしいと思っているし、

のために努力する約束